

## 編集後記

中村学園大学 流通科学部

山田 啓一

今年7月初めにオーストラリアのブリスベーンに出張した際に、“Down Under Map of the World”という世界地図を買ってきた。これは、富山県が作成した「環日本海・東アジア諸国図（通称「逆さ地図」）」のオーストラリア版といってもよいもので、オーストラリアを中心として南極を上、北極を下にした逆さまの世界地図である。

この地図を見ると、オーストラリアからパプアニューギニア、イリヤンジャヤ（インドネシア東部）、フィリピン、台湾、日本を経てカムチャッカ半島に至る東の島嶼部と、オーストラリアからチモール島、ジャワ島・スマトラ島（インドネシア）、マレー半島を経てタイ、ミャンマーに至る西の島嶼部に囲まれた地域が地理的に密接な関係にあることに気づく。この広大な地域に、ASEANに加盟する主要諸国のほか、オーストラリア、日本、朝鮮半島、中国（東半分）、ロシアの極東部などが含まれる。

われわれ日本人から見れば、オーストラリアはもともと英連邦に属する白人の国であり、また南半球にある遠い国でアジアとは別の地域に属する国というイメージがあるが、オーストラリアから見れば、おそらく先に述べた東アジア・東南アジアに近接する地政学的には同じ地域（経済圏）と見ることができるであろう。

われわれはともすれば自分たちのメガネで、相手を理解しがちであるが、先の「逆さ地図」で中国大陸側から日本を見るのと同様、オーストラリア側から日本を見るとどうなるのかという視点も併せて、オーストラリアという国を理解することが大切であろう。因みに、ブリスベーンに行くまで日本は世界で最も物価の高い国と思っていたが、ブリスベーンは日本よりも遥かに物価が高いことが分かった次第である。

グローバル化が進むなか、オーストラリアに限らず、相手国から見て日本はどのように見えるかを考えつつ、相手国を理解し、そのうえで主張すべきことを主張するという態度で対外的にお付き合いをしていくことが求められるようになるであろう。その意味で、流通科学研究所で毎年行っている海外現地調査は意義のあるものであり、今後も現地でしか得られないより多くの情報や知識を収集し、報告していきたいと考えている。